

こどもうるし生活プロジェクト 2017～2019

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学美術学部 公開日: 2020-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安井, 友幸 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/0000000298

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



こどもうるし生活プロジェクト 2017～2019

Children - Urushi Lacquer - Living: Research Project 2017-2019

Tomoyuki Yasui 安井 友幸
Kazunari Oya 大矢 一成

本研究は京都市立芸術大学特別研究助成 2017-002、2018-004、2019-001 の助成を受けたものです。

はじめに

日本の漆工芸は、全国の漆産地で独自の技法と職人による分業生産体制を確立し、世界に類を見ないほど高度で多彩な特色をもって発展してきました。

しかし、近年は日本の生活の変化や、年中行事・冠婚葬祭の簡略化により、漆工芸品を生活のなかで実際に使う場面が少なくなり、子供も大人も漆について知る機会がほとんどなく、漆の存在すら意識したことがないという状況になっているのが現状です。又、子供たちが工作をすることや、生活の道具を自分たちで工夫してつくるといった機会も減少しており、市場で売られているものがどのように作られているのかを知ることや、物を大切に使うということを実感することが難しくなっています。

「こどもうるし生活プロジェクト」は、

1. 子供たちに漆工芸や伝統文化について知ってもらうこと。
 2. 子供たちが参加できる漆の体験型ワークショップを開発・実施し、ものづくりの楽しさを知ってもらうこと。
 3. 子供たちの使いたくなる漆の道具を開発すること。
- を3本の柱に据えて活動をしてきました。

このプロジェクトに興味を持つ学生や卒業生と共に、漆芸の産地の現状調査と研修を行いました。その中で得た考え方や技法をとり入れた体験型ワークショップを行うことにより、子供たちに漆の存在と魅力を感じてもらい、生活の中に漆をとり入れていくきっかけづくりをし

ました。

漆の体験型ワークショップは幼児、小学生、中学生と、その保護者を対象にし、「漆であそぶ」「漆でつくる」「漆を使う」「漆から学ぶ」の4つの段階で行うことを目標に活動をしました。

こどもうるし生活プロジェクトでは、漆の体験型ワークショップを通して漆の存在を知り、手作りする楽しみや喜びを感じることを目指しています。

又、長く愛せるものを日々使いながら、日本の文化を知ることで、漆工芸に限らず伝統工芸の魅力を感じ、職人の仕事に対する敬意が生まれ、生活をたのしむことができる子供たちを育てることを目標としています。

伝統工芸の力によってこれからの日本を美しく力強く生きる力を身につけてもらいたい。子供たちが成長した時に、日本各地の漆工芸産地のよき理解者であり後継者であることも願わずにはられません。「こどもうるし生活プロジェクト」は、失われつつある漆器と日常生活の絆を一膳のお箸や一個の玩具から始めて細い糸でむすぶような活動ですが、いつしか漆工芸の産地と日本文化を牽引する人となる子供を育てる太い綱となるよう、息の長い活動を目指しています。

■こどもうるし生活プロジェクト関連図

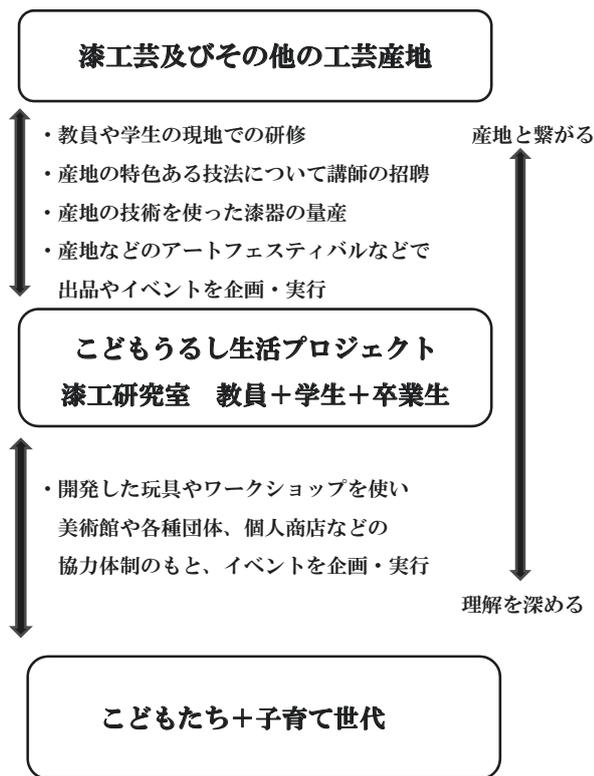


図1 世界三大仏教遺跡 バガンの寺院



図2 ミャンマーバガンの漆器工房

■漆の現状調査・研修

国内外での漆産地や遺跡などでの主な研修実績

2017 年度

8月2日、3日 広島県廿日市市木材活用センター (けん玉工場) 研修

けん玉を使った新しいワークショップの手がかりとしてより良い研修となりました。

8月31日～9月6日

ミャンマーバガンでの漆産地研修

世界三大仏教遺産であり、漆器の産地であるミャンマーのバガンで研修を行いました。

これはアジア漆文化交流プログラムに便乗するかたちでの研修でしたが、アジア各地の漆作家の交流展やシンポジウムもあり、漆の学校でのミャンマーの代表的な漆技法の研修会や多くの工房見学を行いました。産地の現状を知る中で、漆器は日本と同様あまり生活では使われていない現実を知り、日本だけでなく世界の漆を次の世代に伝えていくのが課題であると感じました。

2018 年度 国内の漆器産地研修

漆器産地の研修では、教員の子供も含め総勢 27 名で福井県鯖江市の越前漆器の里と木育施設の「ときなる」を訪ねました。そこで産地の現状を知り、産地で行われている取り組みが実際の生活にどのように関係してくるのかわかることができました。ある工房では親しみやすい明るい色で現代にマッチする漆器を多く手掛けており、若い人中心に人気が高まっているとのことでした。その中の学生一人が卒業後の進路として、この工房に就職が決まり、こどもうるし生活プロジェクトの一員として、今後子供の漆についての産地の取り組みが期待でき、これからの繋がりが楽しみなものになりました。



図3 越前漆器工房 漆琳堂

その他、教員2名と学生2人で、国産漆の7割の生産量を誇る漆の町である、岩手県二戸市浄法寺や、津軽塗の試験場など東北の漆産業の中心地を訪ね、産地の実情を知ることができました。国産漆の需要が文化財の修理中心に高まっており、まだまだ供給が足りないとのことで、生産量拡大の取組も必要だと知りました。しかしながら、漆掻きの掻き子さんの実情は厳しく、生産量を増やすためにも国上げての取り組みが必要だと感じました。その中で縄文時代の遺跡群から出土した漆塗り土器や藍胎漆器にその当時のいきいきとした漆のあり様に私どもは感銘を受け、この脈々と繋がってきたこの漆文化を次の世代に受け渡す思いが高まってきました。



図4 岩手県浄法寺漆林

2019年度 6月21日・22日
武生越前箆筒工房「小柳箆筒店」
越前漆器会館など 研修

昨年度に引き続き、漆産地の研修として、福井県武生市と鯖江市に総勢14名で2日間の研修旅行に行きました。武生にて越前箆筒工房の見学や、鯖江市の漆器の里会館・

漆琳堂・Hacoa・TURISTOREなど、モノづくりの町の現在の姿を知ることでもとても良い研修となりました。工芸産地の生き残る道は技術とアイデアと実行力！若いデザイナーを地域に呼び込み、互いに協力し高め合うことで町全体が活性化し、そこに人が集うことで良い方向へ向かっていると感じました。

9月1日～8日

岩手県南部の漆工芸現状調査

南部鉄器の漆の焼き付け技術の研修、中尊寺等の漆工史跡、秀衡塗丸三漆器工房など見学と研修を行いました。

■漆から学ぶ・漆を使う

産地の漆工技術の習得 2018・2019

輪島漆器の産地の技法である「沈金」の技術指導に輪島より漆芸作家の斎藤誠人氏を招き、沈金実習（学生と教員が参加、各3日間）を行いました。短時間で豪華な仕上げが得られる為、ワークショップへの導入が期待されます。



図5 沈金実習 学生手板

■漆であそぶ・漆をつくる・漆から使う・漆から学ぶ

漆の技法を使ったワークショップの開発と実施

これまで学んだ漆工技術を使ってワークショップの開発をし、実施しました。

2017年度

会津まちなかアートプロジェクトにて

「けん玉カスタム-漆でカッコつけよう-」を実施。

10月15日 会津稽古堂美術工芸スタジオ

漆の技法である「変わり塗り」の研ぎ出しや艶上げを体験する講座を実施しました。

2018年度

会津まちなかアートプロジェクトにて

「世界に一つのMY漆塗りのスプーンをつくらう」を実施。

10月21日 会津稽古堂美術工芸スタジオ

スプーンの柄に施された「変わり塗り」の模様を研ぎ出し磨き上げる講座を行いました。

2018年度、2019年度

銅駝美術工芸高校アートフェスティバルにて「きらきらした螺鈿を使ったアクセサリー作り」を実施。
2018年10月12日と2019年11月2日 銅駝高校

2019年度

京都芸大サマーアートスクールにて、「漆工チャレンジ 沈金技法を使ったアクセサリー作り」を実施。

8月6日 京都芸大(参加者25名)

産地の技術研修で習った「沈金」の技法を使った講座を行いました。



図6 受講生作品

2019年度

かめおか霧の芸術祭関連企画「霧空に飛ぶ 金色にきらめく漆塗り竹とんぼを作ろう」を実施。

亀岡市内の小学校2校で、漆塗りの竹とんぼに金箔で模様を入れる講座を開催しました。芸大生が制作した紙芝居で漆への理解を深めた後、竹とんぼに金箔で模様を入れ、早速飛ばして遊びました。その後、かめおか霧の芸術祭にて成果発表が行われました。(小学校2校 参加者計60名)



図7 漆塗り竹とんぼ完成品

■漆であそぶ

触って遊べる漆のアート作品、漆の遊具、漆の玩具の制作実際に手に触れ、体感することで、漆塗りの魅力を感じる玩具を開発し制作しました。制作は主に大学の夏期休業中に学生主体で行い、イベントやワークショップ会場内に設置して、子供たちに楽しんでもらいました。

2017年度

漆塗りパズル「うるし9」と「リンゴリンゴボーリング」を制作。

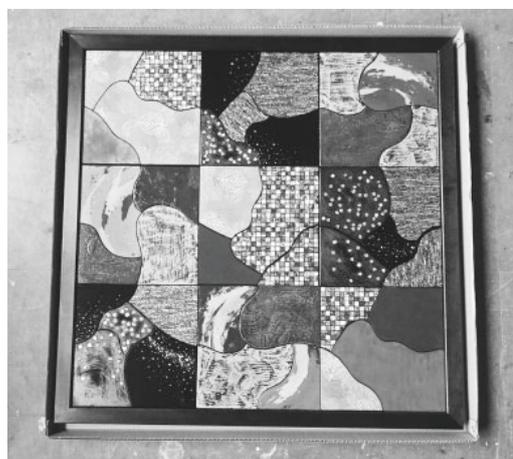


図8 漆塗りパズル「うるし9」

2018 年度

駒崩しパズル「T-3」と大型遊具漆塗りすべり台「うるしやまのぼるくん」を制作。



図9 うるしやまのぼるくん

2019 年度

リンゴちゃんの住む街「URU-CITY パズル～うるしりんご町七丁目～」を制作。



図10 URU-CITY パズル～うるしりんご町七丁目～

■漆でつくる・漆を使う

漆の食器の開発

2019 年度

子どもが楽しく使えるお皿「おやまのおさら」を設計し、輪島の木工所で量産を行いました。漆で仕上げて完成したら、これを持ってお山にピクニックに出かける予定にしています。



図11 おやまのおさら木地

■その他活動実績

漆をつかう・学ぶ ワークショップの実施

「パン屋で出会った陶芸家と木工家のうつわ展」の関連企画である、「木と陶のうつわとパンと野菜料理を味わう会」2018年11月18日

京都府亀岡市 薪窯パンふくくる

漆器や陶器、パンの話聞きながら、作家と語らい食す会を実施しました。「うるしやまのぼるくん」と「うるし9」も展示され好評でした。

冬の水あそび森あそび 大矢一成 木のしごと展

2018年12月5日～1月14日 兵庫県有馬玩具博物館にて五感であそぶ木漆作品を展示しました。

12月5日 感じるワークショップ「目で聴く、耳で視る」(参加者30名)

12月22日 つくるワークショップ「木と貝でクリスマスオーナメントをつくろう」(参加者6名)

まとめ

2017年から始めたこどもうるし生活プロジェクトは、国内外の漆芸の産地の現状調査と研修で得た成果と、うるしの魅力を、子供達や子育て世代に親しみやすい形で伝えていくことを目標に活動を進めてきました。漆芸産地に足を運び、工房の職人や作家と直接話をし、街の歴史や風土を見聞きすると、漆芸産業は、職人の高齢化や生産量の低下など厳しい現状がありますが、一方で日本の漆芸従事者の層の厚みや漆工技術はまだ高いレベルを保持しており、漆の魅力を伝えようとする活動が各地で起こり始めていると感じました。

こどもうるし生活プロジェクトの真の成果があらわれてくるのは、何十年も先かもしれません。しかし、漆のことを全く知らない子供達が漆の存在を意識するようになることや、自分の作品を作ることを以外に、漆のことを誰かに伝えようとする学生の姿勢が生まれてきたことは、今後の漆工芸や日本文化に何らかの良い影響があると信じています。

工芸は自然の恵みと人間の叡智の結晶であり、自然の中で永続的に人間が文化的な生活を営むことの知恵が詰まっています。今後のものづくりに欠かせないAIやデジタルファブリケーションの発達を、より人間的な喜びを伴うものとするためにも、ものづくりの原点である手づくりによる創造力が重要だと考えます。

この3年間の活動により、漆を学ぶことで感受性や創造性を高める「感性の教育」ができるのではないかという可能性を強く感じるようになり、今後も活動内容の精度を上げていきたいと考えています。

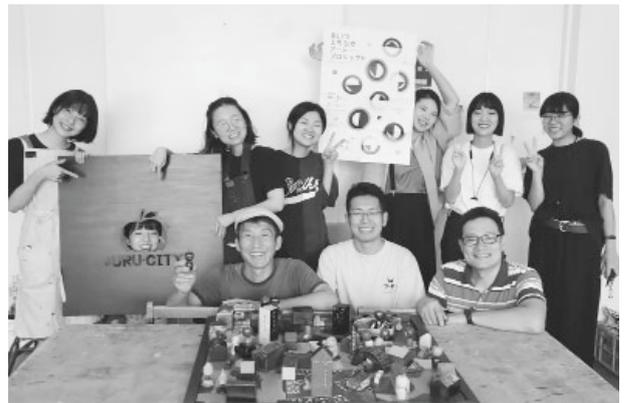


図12 2019年度プロジェクト参加者